

序章 明治東京へヨウコソ

——その日は、やけに明るい夜だった。私は立ち止まり、ふと空を見上げる。

(赤い……)

夜空にぼっかりと浮かぶ満月は、まるで夕陽のように赤い。作りものめいた満月だ。

(……不吉だなあ)

実際は単なる光学現象なのだろうけど、なんとなく不気味な感じがしてしまふ。それこそ、ホラー映画の観すぎなだけかもしれないけど。

(早く帰らなきゃ)

再び歩き出そうとしたその時、ひんやりとした夜風に乗って、奇妙な音楽が聞こえてきた。

(アコーデオン……かな?)

新しいような、懐かしいような。明るいような、暗いような不思議な音楽。その音色に誘われるように、たくさんの人影がすぐそばの大きな公園へと吸い込まれていく。どうやらこの公園で、お祭りが開かれているらしい。今はお祭りという季節でもないのだけど。

(……でも、楽しそう)

好奇心旺盛な私の足は、ふらり、ふらりと無意識のうちに公園を目指していた。早く帰らなきゃ、お父さんとお母さんに怒られてしまふ。けれど、すぐそこに見える提灯ちようちんのあかりと軽やかな音楽に、どうしても心が浮き立ってしまう。

(……いいよね、ちよつとくらいなら)

10分。……ううん、5分だけ。そう自分に言い聞かせて、私は走り出した。

「うわあ……」

公園で開かれていたお祭りは、私の予想以上に賑やかだった。金魚すくいに射的、焼きトウモロコシにラムネ。焼きそばやフランクフルト。定番の縁日メニューはもちろん、骨董風の家具や生活雑貨、それに植木なども青空市のように並べられている。そして道行くお客を沸かせているのは、大道芸人たちだ。

「さあ、お立ち会いお立ち会い！ 手前ここに取り出したる陣中膏はこれ、ガマの油。ガマと言ってもそんなじよそこらのガマとは物が違う！」

（あ……なんか聞いたことあるかも）

たしか『ガマの油売り』というやつだ。つい最近、テレビで観たような気がする。江戸時代から続く軟膏の実演販売で、今聞いたセールストークが大道芸として受け継がれている、とかいう話だったような。

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！ お代はあとで結構だよ、ハイ入って入って〜」

こっちは見世物小屋の呼び込みのようだ。小屋の前に、おどろおどろしい絵が描かれた看板が飾られている。

（こういう見世物小屋って、実際はたいしたことなかったりするんだよね）

客引きは大層な煽り文句を並べるけど、当然、へび女なるものが実在するはずもない。期待はずれなのは目に見えている。それでも、あえて見たくなるのが人情というもの。入ろうかどうしようか悩んでいると、今度は背後から陽気な声が聞こえてきた。

「さあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい。西洋奇術博士が贈る、世紀の大マジックショーだよ〜！」

振り返ると、そこにはひとときわ大きな人だかりがあった。簡易的に作られた舞台の上で、片眼鏡と燕尾服姿の奇術師らしき男性が笑顔を振りまいている。

「ご覧頂きますこの箱、実は入れたものすべてをこの世から消してしまうという摩訶不思議な箱にございます」

奇術師は恭しく手を広げ、正方形の大きな黒い箱を指し示した。ちようどおとなが1人入れるほどの大きさだ。

「象、飛行機、戦車、なんでも消してご覧にいれましょう。さあどなたか、自家用ジェットをお持ちの方はいませんか？ 今日はいンドから象に乗ってやって来たという方は手を挙げて！」

観客からドツと笑い声が湧く。

(なんだかおもしろそう)

その声に乗せられて、私もついつい舞台に近寄ってしまう。

「……………」

(……………?)

その瞬間、舞台上の奇術師と目が合った。——ような気がした。

「ハイ象をお持ちの方はいらっしやらない。では今夜は特別に、ここにいらっしやるお客様1人を消してご覧にいれましょう！」

(あ……………?)

気のせいではなく、確実に目が合っている。奇術師はにやりと笑った。ものすごく、嫌な予感がした。

「ハイ、そこのかわいらしいお嬢さん！」

「!?」

「そう、そのアナタ、ハイ舞台に上がって上がって!」

「えええっ!?」

観客たちの視線が、一斉に私へと集まる。

(なんで? なんで私なの……っ?)

ただふらりと立ち寄って、ただ目が合っただけ。それなのにまさか舞台に呼ばれてしまうなんて。予想だにしなかった展開に戸惑っていると、周囲の人たちに背を押され、あっというまに舞台へと引っぱり上げられてしまった。

「さあ、こちらの気の毒なお嬢さん! 箱に入るとあら不思議、ワタクシが3秒数える間にきれいさっぱり消えてしまいます!」

(うう、恥ずかしい……)

もともと私は、目立つことをするのが苦手な性格だ。できれば3秒数えるよりも早く、ここから消えてしまいたい気分だった。

「ではお嬢さん、覚悟が決まりましたらこちらの箱にお入りください!」

観客から『がんばれ』と声がかかる。彼らの期待と好奇に満ちた視線が舞台に集中し、いまさら逃げるわけにもいかない。

(くうう、この笑顔が恨めしい)

楽しげにうながす奇術師をちらりと一瞥し、私はしかたなく箱の中に入った。

箱の中は体育座りをして少し余裕がある程度だ。おそらく二重の構造になっていて、仕掛けの分だ

け狭くなっているのだと思う。

(……閉所恐怖症だったらアウトだよね)

やがて頭上から影が差した。ゆっくりと視界が暗くなっていく。

(わ……真っ暗)

ぱたんと、箱の蓋ふたが閉められた。外部から遮断されたせいとか、お祭りの喧噪けんそうが遠くなる。

「さあ勇敢なお嬢さんの運命やいかに！ 見事成功いたしましたらご喝采かつさい！」

(はあ……。このマジックが終わったら早く家に帰らなくちゃ)

早く家に帰って、学校の宿題を済ませよう。晩ご飯を食べて、友達にメールして、図書館で借りた本を読んで。

(あとは、なんだっけ……。?)

「では参りましょう！」

そう、あとは眠るだけだ。

「3！」

深く深く眠るだけ。

「2！」

夢も見ないほどに、深く……。

「1！」

……。深く。

(……………あれ?)

ふわり、と身体が浮いたような気がして目を開けた。視界は暗く、遠くで誰かの声が聞こえる。やけに全身がだるい。学校が休みの日に15時間くらい寝てしまった時の、あの罪悪感を伴う身体のだるさと同じ。じっとしているとぬかるみの中へと引きずり込まれてしまいそうな、不安定な感覚。

(なんのあかりだろうか?)

やがて薄闇の中に、ぽつぽつとほのかなあかりが灯り始める。曇りガラス越しに見るような、ほたるび 蛍火にも似たぼんやりとしたあかりだ。

「……………あらあら、無防備だねエ」

「かわいい人間の娘じゃないか。喰ってしまおうよ」

(……………喰う?)

ふわふわとした夢うつつの中、あまり穏やかでない会話が聞こえる。

身体を起こしたい。でもだるくて動けない。

「意地悪をお云いでないよ。そつとしといておやり」

「どうしてさ。寝ているみたいだし丁度ちやうどいいじゃないか」

これは果たして、夢なのか。この声はいったい誰なんだろう。それにしても、身体がだるい……………

「ほら、よく見てごらん。この子は——」

冷たい指が、私の頬をそつと撫でた。

\*

\*

「わあっ!？」

頬を伝う冷たい感触に驚き、私は弾かれたように起き上がった。

(な、なに? 今の)

恐る恐るあたりを見回したけれど、真っ暗で人の気配がない。でも、たしかに誰かに触れられた気がした。夢だとしたら、あまりにもリアルすぎる。

鬱蒼<sup>うっそう</sup>と生い茂った木が、ざわざわと風に揺れる音がした。だんだん目が慣れてくるにつれ、暗い視界のなかに淡いあかりがいくつか見える。

(ここは……公園?)

ただっぴろい広場の中心に、私はいた。どうやらベンチで眠っていたようだ。

(誰もいない……)

静まりかえった公園にひとりぼっち。さっきまでお祭りが開かれていた場所とは思えない静けさだ。アコーデオンの旋律。子供たちの笑い声。ラムネの中のビー玉がカラカラと鳴る音。大道芸を披露する道化師——。すべて消えていた。マジックのように。

(で、ここはどこなの?)

まったく見覚えのない場所に、私はいた。

ベンチや東屋<sup>あずまや</sup>のようなものがあるから公園なのだろうけど、とにかく広くて暗くて、どこが出口

なのかささえもわからない。途方に暮れた私は空を仰いだ。夜空には、ぎよつとするほど赤い満月が浮かんでいる。

(赤い月……)

ぞくり、とした。

「早く帰らなくちゃ」

不安と心細さがこみ上げてくる。今すぐに帰らなければ。でも――。

(私は、どこに帰ろうとしてたんだっけ?)

「ああよかった、こんなところにいた!」

「!？」

突然背後から呼びかけられ、ビクツとした。

「やあやあ、無事だったようだね。お嬢さん」

「あ!」

燕尾服に片眼鏡。糸のように細い目。そこにいたのは、お祭り会場でマジックを披露していた例の奇術師だった。

「あなた、さっきの……!」

奇術師はにっこりと微笑み、ぱちんと指を鳴らした。するとその右手に、ピンクのスカーフが現れる。

(え? ええっ? その布、どこから出てきたの……?)

私はごしごしと目をこすった。まるで彼の手の中から飛び出したように見えたからだ。そして彼は、

なぜかそのスカーフを私の首にくるりと巻きつけた。

「これは僕のマジックショーに出演してくれたお礼だよ。どう？ あったかいだろうか？」

「あ、マジックショー！」

そういえばあのマジックショーはどうなってしまったんだろう。箱の中に入ってからの記憶がない。

(まさか、箱の中で寝ている間にお祭りが終わっちゃったとか？)

……あり得る。というか、それ以外にこの静まり返った公園の状況を説明できる術がない。

「あのっ、ごめんなさい」

「ん？」

「私のせいで、マジックショーが台無しになっちゃったんですよね？ 本当にごめんなさい。なんか

……その、箱の中で寝ちゃってみたいで」

自分でもなにを謝ればいいのかよくわからなかったけど、とりあえず謝ってみる。

「私、普段からわりと寝つきのいいタイプで、でもまさかあの一瞬で寝ちやうと思わなくて。よっぽ

どあの箱の中が寝心地よかったのかなって、思っ……」

「ああ、違う違う。たしかにマジックショーは失敗したけど、君のせいではないんだ」

私の言葉をさえぎるように、彼は言う。

「え、そうなんですか？」

「うん。いや……むしろ大成功といえるかな。そう、少なくとも失敗ではないよ。マジックの主旨か

らははずれていないし……」

「？」

(よくわかんないけど、成功したならよかった)

大成功との言葉に、胸のつかえが少しだけ取れた。それなら私が寝ている間に、すべての物事が正しく運んだに違いない。きつとそうだ。

「ところで、私、道に迷っちゃったみたいで……。ここってどのあたりなんでしよう?」

「ここ? ここはね、うん。ちよつと待って」

彼は燕尾服を翻し、優雅にぱちんと指を鳴らした。たちまち本らしきものがポンツと出現する。あつけに取られている私をよそに、奇術師はその本をぺらぺらとめくりながら『うーん』と小首を傾げた。

「ええと、日比谷が原……てことはつまり、今でいう日比谷公園のあたりかな」

「……は? 日比谷公園、ですか?」

(ていうかそれ、地図だったの?)

いろいろと突っ込みどころはあるけど、それはさておき、だ。

日比谷公園といえば、東京のオフィス街にあるあの広い公園しかない。なぜ今、自分がそんなところにいるのかさっぱり見当がつかなかった。

(……それにしても、夜の日比谷公園ってこんなに暗かったっけ?)

街灯はほとんどなく、星がくつきりと見えるほど闇が重い。東京のど真ん中だというのに、人里離れた場所に迷い込んでしまったかのようだ。

「あの……じゃあ、最寄り駅ってどっち方面だかわかります?」

私の問いに、奇術師は地図から目を離して大仰おおぎょうに肩をすくめてみせた。

「それは実に難しい質問だね。単純に駅といってもいろいろある」

「あ、なんでもいいんです。JRでも地下鉄でも」

「残念ながら、地下鉄はないんじゃないかなあ？ うん。そうだな……強いて言うなら、新橋ステイションしんばしが最寄り駅になるんだろうか」

（新橋ステーションって、新橋駅のこと？……なんで急に英語混じり？）

妙な人だ。もしかするとこの人は、東京に来たばかりの外国人なのかもしれない。

（いやいや、日本語は上手だから、久しぶりに東京に帰ってきた帰国子女なのかも……？）  
それなら、彼が地図とにらめっこしているのも納得がいく。

（……とにかく、この公園から出なきゃ）

ここが日比谷公園なら、外に出れば駅が見つかるはず。もしくはタクシーをつかまえてもいい。

「じゃあ私、そろそろ帰りますね」

「帰るって、どこに？」

「は？」

「どこに帰るつもりでいるのかな、お嬢さん？」

「どこ……って」

（そういえば私、どこに帰るつもりだったんだっけ？）

帰る場所といえは、家しかない。それはわかっているのに頭の中がぐるぐるして、自分の家がどこにあるのか思い浮かばなかった。

（……私、寝ぼけてるんだ、きつと）

きつとそう。ここは暗くて不安になるばかり。早く、明るいところに出なければ。

「わ、わかんないけど、とにかく帰るんです」

「帰る場所がわからないのに帰るんだ？ そりゃあまた、ずいぶん難易度が高そうだね」  
彼は感心したように腕を組んだ。片眼鏡の向こうの瞳が、きゅつと細くなる。

(いったいなんなの、この人……)

「そうそう、それよりさっきのマジックショーのことなんだけど……。どうやら僕の不手際により、君を本当にこの世から消してしまっただけだ」

「は……い？」

奇術師のにやかな顔が、月の光を受けて妖しく輝いた。その突拍子もない発言に、私はぼかんと口を開けるしかない。

「ごめん、急にこんなこと言ったら驚くよね。でも安心して。僕は決して怪しい者じゃない。君をこの世から消したと言っても、なにも僕が君のことを殺しちゃったわけじゃないんだ。そういう意味で消したわけじゃないから、どうか安心してほしい」

「殺……し……？」

ものすごく物騒なキーワードを耳にし、血の気が引くのを感じる。私は1歩、後ずさった。

「いやいや、違うんだ。とにかく僕を信用してほしい。僕は極めてまっとうで善良な人間だってことをわかってほしいんだ。君を騙だまそうとか、危害を加えようとか思っていないよ。ほら、この澄んだ目を見れば、僕がいかに信用できる人間かわかるだろう？」

「ちっともわかりません」

つい、本音が出てしまった。自分のことを『怪しくない』などと言ってしまった人ほど、怪しいものもないと思う。

「おや、どうして？　こんなに好青年なのに」

「逆です。あなたが見るからに怪しい人だからです！」

「はははっ、またまた。冗談きついなあ」

「本音です、本音！」

（この人、やっぱり危ない人だ……！）

私のあからさまな警戒心を感じ取ったのか、彼はこほんと咳払いをして背筋を伸ばす。

「まあまあ、とりあえず落ち着いて。怖がらせてしまったお詫びわにいいものを見せてあげようじゃないか」

怯えおびまくる私を横目に、彼はパチンと左手の指を鳴らした。

「……わっ！」

私は目を見はった。一瞬のうちに、彼の手の中から3羽のハトが飛び出したからだ。

「な、なに今の、魔法……？」

「魔法じゃないよ。マジックさ」

奇術師は得意げに胸を張ってみせる。

「……お見事でした。すごいですね」

「そう？　よかった！　やっと信用してもらえたみたいで嬉しいよ」

「いやいや、信用してませんからっ」